

## 2020年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として1998年4月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とします。

(B) 活動・研究助成金	
対 象: 学部学生・大学院生(個人・団体)	面接日時: 2020年5月11日(月) 18:30~を予定。個々の面接時間はあらかじめ連絡する。
支給額: 総額20万円	面接会場: 立教大学池袋キャンパス 16号館第2会議室
採用品数: 1~2件	備 考: 採用者(団体)は活動・研究の中間報告を10月末に提出の上、最終的な報告書または論文を翌年1月中旬に提出すること。提出された活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。
選考方法: 書類審査・面接	
提出書類: ①活動・研究助成金願書* ②奨学金使途を含む活動・研究計画書(A4用紙 3枚程度 書式自由)	

書類提出期間: 2020年4月1日(水) ~ 2020年4月30日(木) 17:00まで ※独立研究科事務室は20時半まで

書類提出先: 学生課奨学金窓口(池袋/新座)・独立研究科事務室

採用発表: 5月18日(月) 学生課奨学金掲示板(池袋/新座)、ジェンダーフォーラム掲示板(10号館通路)に掲示予定

授与式: 5月下旬(予定)

### 【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書(願書)の利用目的】

標記の申込書(願書)で取得した個人情報は、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。

以上に同意した上で、申込書(願書)を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「立教大学プライバシーポリシー: 個人情報取扱いに関する基本方針」(<http://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/>)を参照すること。

※(A)ジェンダーフォーラム論文賞の募集は10月に行います。詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。

ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス6号館1階) Tel: 03-3985-2307 E-mail: [gender@rikkyo.ac.jp](mailto:gender@rikkyo.ac.jp)

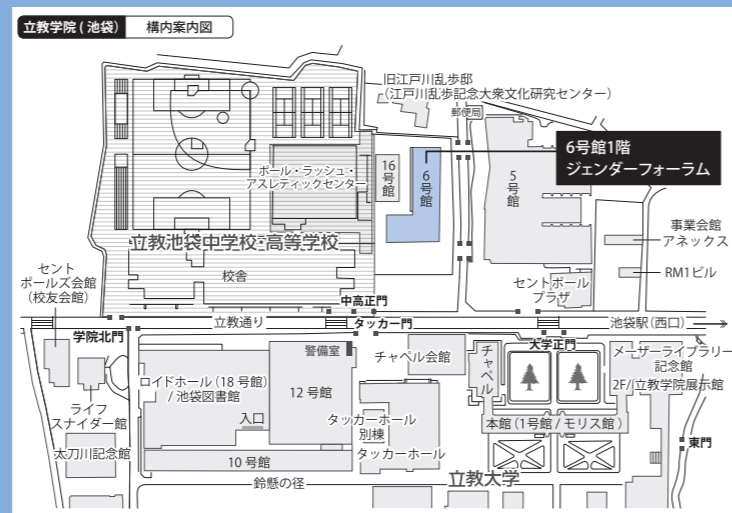
\*申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生課窓口(池袋/新座)、独立研究科事務室窓口にあります。ホームページ上からもダウンロードできます。

(<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>)

## 立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」とらわれず、性差やセクシュアリティ(性自認・性的指向など)についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー(gender)とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女/男らしさ」「女/男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館(1998年閉館)の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒアワーなどを開催しています。

開室日: 毎週月曜日~金曜日  
開室時間: 10:00~16:00  
場 所: 立教大学池袋キャンパス6号館1階  
TEL&FAX: 03-3985-2307  
E-mail: [gender@rikkyo.ac.jp](mailto:gender@rikkyo.ac.jp)  
URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>

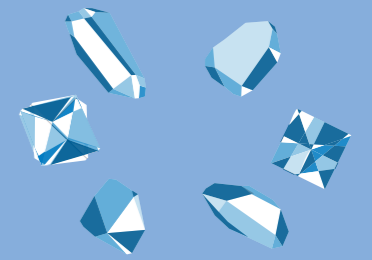


詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPでご覧ください。

# GEM

Vol.42 2020.3.31

Rikkyo Gender Forum News Letter



Gender Forum  
Rikkyo University



Gemとは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館(1998年閉館)の“M”にちなんだものでした(Gender Encountering in Mitchell)。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味する Gender Equality in the Making とし、ニュースレター、メーリングリストの名前として使用しています。

### 2019年度公開講演会(2019年11月8日(金))

## 「ミソジニーとは何か？」

登壇者: 上野千鶴子氏(東京大学名誉教授、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)理事長)

11月8日、上野千鶴子氏による「ミソジニーとは何か？」という講演会に参加した。「女ざらい」をテーマに、ジェンダーについて理論的に説明して下さった。

上野氏は、家父長制を支える「ホモソーシャル」「ミソジニー」「ホモフォビア」の3つのつながりを用いた説明で、男性のホモソーシャルな社会のなかで、男または女として認められることについて、ジェンダー非対称性があると指摘した。そこでは男は男に認められて男になるが、女はホモソーシャルな社会の中にいる男に選ばれることで女として認められるため、女が女であることは男に依存しているという。このホモソーシャルな男性集団は欲望の主体であり、女性は常に欲望の客体であり、男は男として認められなければ、女性化(=客体化)されてホモソーシャルな社会から排除されるという恐怖がある。このことを考えると、ホモソーシャルな社会もすべての男性にとって心地の良いものではないことが分かる。

このホモソーシャル、ミソジニー、ホモフォビアが、重力のように存在する社会のなかでわれわれはどのように対抗していけばいいのか。ある個人のふるまいを、ジェンダーを参照して説明することを Doing Gender というのに対して、ある個人のふるまいを、ジェンダーを参照して説明するのをやめることを Undoing Gender という。上野氏は、この Undoing Gender を日常のなかでその都度実践していくことで世の中の空気を変えていくことが必要であると仰っていた。

以上は講演内容の一部であるが、この基本的なジェンダーに関する知識を持ち、Undoing Gender さえできれば、本当に世の中の空気は変わっていくのだと感じた。大きな運動が取り上げられなくても、ひとりひとりが実践をしていくことが大切であると感じた。

フェミニズムについての話を聞く男子大学生の動機はおおかた、自分がその加害者になりたくないということだと思う。この消極性は、いま考えてみると、フェミニズムに理解を示しながらも、ホモソーシャルな社会から排除されることを恐れる気持ちから出たものだったように思える。しかし、フェミニズムに本当の意味で参加するには、ある程度の積極性が必要であり、このままでは結局、傍観者となって、空気を再生産してしまいかねないと感じた。そういう意味で、われわれ男性はどこまで行っても当事者である。フェミニズムはその問題提起の場面においては女性が活躍しやすいのかもしれないが、そこから先へつなげていくためには、男性が主体的に、我々自身の問題として取り組まなければいけないのだと感じた。

大野航洋(本学社会学部社会学科3年)

第79回ジェンダーセッション(2019年12月10日(火))

## 「エジプトにおける高齢者介護をめぐる ジェンダーポリティクス」

登壇者：鳥山純子氏(立命館大学国際関係学部 准教授)

ジェンダー研究は性的少数者などの特別な人間のものとされがちであるが、実はテーマは日常生活の中にある。今回のジェンダーセッションは鳥山純子氏のそんな指摘で開始された。エジプトにおける高齢者介護を通して、社会や価値観の変化、そして従来研究で語られていた「従順な女性である限り保護されて支援を得られる=古典的家父長制」をあらためて問い直した興味深い時間となった。

研究フィールドはあるピラミッド近郊の村で暮らす7人の子供を育てたご夫婦とその子供たち家族である。2000年に脳梗塞で倒れた舅が4度の復活をとげ2011年73歳で永眠、2017年に9歳下の姑が脳疾患で倒れる。「研究計画が狂った」一方で、まさに氏の年代にふさわしいテーマとなった。フィールドを通じたジェンダー研究は観察者のあり方が強く反映される。高齢者介護は若手には意外と盲点となるテーマの一つである。

加えて若者中心のエジプトで高齢者問題はやっと言及されはじめたばかり、老人ホームはなく、急性の病による突然死が多かった。結果、高齢者介護が「未知の領域」で息子中心の家庭内交代制で介護した2000年から介護のプロを頼む2017年までの高齢者介護を軸に展開するエジプトの家族関係がそこにみとれる。

エジプトの医療システム、病院は救急ファーストで長期入院がなく、基本自宅療養となる。町の薬剤師が地域医療の担い手であり、薬の相談・デリバリー、そして死亡確認も行う。姑の介護では最終的

に2016年頃より誕生した介護サービスを利用したが、早い時期からプロに任せる価値観をもったイランと違い、希少な選択であるという。ここに「人が容易に死ななくなったため」発生する問題、「誰が介護するのか」の課題がみえてくる。そこから家族の権力構造をみてとれると氏は指摘する。

妻を亡くした高齢男性は再婚をすすめられ、離婚した女性は介護の担い手として高齢男性との再婚を求められる。逆に夫を亡くした高齢女性は「離婚した娘」を介護の担い手といわれる。「男兄弟の財布」に期待し「母親を介護することでその支援を得られる娘」は家庭内権力への従属と介護の二重負担を強いられる。この関係は家事や育児など女性が「愛情から主体的にやる」とされるテーマではなかなか見えにくい構造であるとのことであった。

今回の発表はあくまで1事例から展開した発表であったが、多くの発展的テーマを含んでいたと思う。今後が期待される研究であると強く感じた。(了)

伊東聰(イスラーム・ジェンダー研究会メンバー)

2019年度映画上映会(2019年12月16日(月))

## 映画『わたしたちの家』上映会&清原監督講演会

登壇者：清原惟氏(映画監督)

「女性」と「家」——この二つの言葉を聞いた時に、マイナスなイメージを抱くのは私だけだろうか。今日、女性蔑視を連想させる言葉や漢字などに注目が集まっている。例えば、嫁という漢字は家にいる女というイメージがあり、奥様は家の奥にいるというイメージがある。これらは、女性が家を守り子育てに専念することが仕事で当たり前だった時代に作られた言葉であるため、現代に適さないのは仕方ない事だが、やはり私には家と女性の関係はネガティブに思えてしまう。

12月16日に開催されたジェンダーセッションでは清原惟監督が登壇し、彼女が制作した映画『わたしたちの家』を上映、そして講演会を行った。この映画には、パラレルワールドと思われるような描写が出てきたり、登場人物に謎が多かったりと常に不思議な雰囲気漂っていた。上映中私はその不思議な世界に引き込まれてしまい、監督が映画の節々に込めた思いを感じ取ることができなかったのだが、上映後の講演会でそれらは明らかになっていった。

私が特に注目したのは、四人の女性たちと家の関係である。上記でも述べた通り、私は女性と家の関係はあまり良好だとは思えなかった。近年では、結婚後も働く女性が増え、専業主婦が減り、女性が家に一日中とどまることも少なくなってきた。しかし、少しさかのぼると日本でも他国でも女性は家に束縛され、自由な外出は中々許されず、家のことをこなすことが女性の役割とされてきた。そのた

め、家は彼女たちにとって居心地の良いものではなく、自由が許されない牢獄の様に私は感じてきた。

けれども、監督は女性と家の関係はある意味神秘的なものであると語っていた。仕事から帰ってきて食事をするため、寝るためだけに家を利用している男性とは違い、女性は長い時間、家との濃い時間を過ごし守っているのだと。これは私にとって新しい考え方であり、非常に印象的であった。

今回の映画では登場人物の多くが女性で、男性はほとんど登場することがなく、男性が関わっていないことで女性と家の関係がより鮮明に映し出されていた。今後時代が流れ、女性と家の関係がこの両者だけの特別なものではなく、男性と家の関係も女性と同じようなものになる時代が来れば「家」と「人間」の関係というより広い枠ができるのではないかと思い、改めて考えてみたい。

丹波早雪(本学文学部キリスト教学科2年)

## 「多様なセクシュアリティへの理解と環境整備について考える会」について

本会は2018年8月に学内有志により発足し、学内関係者との協働をより円滑に行うため、2019年9月にR-CAPプロジェクトとなり活動を継続している。現在のメンバーは教職員10名で構成され、ジェンダーフォーラムには協力機関として関わっていただいている。(R-CAPとは、Rikkyo Cross-functional Active Projectの略称で、人事課が管轄する職員研修制度の1つである。)

本会は、本学のセクシュアルマイノリティ学生への支援は学生の目に見える形ではまだ行われていないことを課題に掲げ、本学構成員が多様なセクシュアリティを意識し、理解を深める機会を提供し、多様性への受容文化を醸成することで、学生が自分らしく活動できる環境を整えることを目的としている。

2019年度は「他大学調査」「学内関係者へのヒアリング」「コーヒアワー(ジェンダーフォーラム主催)の新座キャンパス開催」を行った。具体的には、他大学調査と学内関係者へのヒアリングにより、他大学と本学のセクシュアルマイノリティ学生等への支援状況を把握・比較し、本学の現状を事務主管者会議へ報告した。また、ジェンダーフォーラムの協力のもと、池袋キャンパスで企画・運営されているコーヒアワーを新座キャンパスでも2回開催し、セクシュアリティについて安全に語り合える場を提供した。参加者は少なかったものの、学生が安心して相談できる体制整備への第一歩を踏み出すことができたと考えている。2020年度は2019年度

の活動を踏まえ、学内関係者から伺った様々な内容を丁寧に参照し、目的の実現に向けて必要な取組を行っていきたい。

私は現在、学生相談所に所属している。2018年7月に開催されたキャリアセンター勉強会(テーマ:LGBT等セクシュアルマイノリティを知る・学ぶ)に参加し、はたして学生相談所はセクシュアリティに関する相談の受け皿になっているだろうか、と考えさせられたことが本会へ参加するきっかけとなった。学生相談所では、2018年10月に明治大学の佐々木掌子氏をお招きし、「多様なセクシュアリティへの理解」(共催:ジェンダーフォーラム、キャリアセンター、人権・ハラスメント対策センター)をテーマに講演会を開催した。その中で佐々木氏は、教職員一人一人が多様な性にポジティブであることが、多様な性にポジティブな環境をつくることにつながる、と話され、勉強を始めたばかりの私にとって、姿勢を示してもらえたことは大変有り難かった。これからも時々立ち止まり、自身の姿勢を確認しつつ、本会の活動に携わっていきたいと思う。

熊谷雄子(本学職員)